



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	体育の研究と指導の43年
Author(s)	宮崎, 兼光
Citation	北海道大學教育學部紀要, 27, 191-202
Issue Date	1976-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/29146
Type	departmental bulletin paper
File Information	27_P191-202.pdf



体育の研究と指導の43年

宮 崎 兼 光

Forty three years of my study and teaching
on the Physical education

Kanemitsu Miyazaki

は じ め に

教職43年、教育者であることを自負して歩いて来た道のりである。数字を見つめて長いと思うが、顧みて長さの実感が持てない。退官の日を目捷の間にして何かを書き留めようとする、年月も事象も茫漠として意図するものが姿を潜めて仕舞う。ただでさえ記憶に弱いのに年輪を加えたので、外見の若さを自慢する機会が多いが生理学的には老化が免れない。

43年を区分してみると、小学校で初等教育に10年、以来33年を体育教師としてそのうち戦争期4年を中等教育に、戦争後の29年を大学で体育教育に携わった。私は常に良い指導者や理解者の巡い会いに恵まれて、私にとって最も良い生き方を与えてくれたし力強いバックアップをして貰えた。そうして歩いた道が私にとって相応してあって、他の事ではきっと何も出来ぬ人間であったろう。だから教育という職をやめようと思った事は無かったし、豊かでは無いが貧困な暮しではないと思っていたから、力の及ぶ限りの努力をして来た。そして生活の中に求めたレクリエーションが、また自分の学問の道になっていた。

究めようとしたことは科学的原理の発見ではなく、科学的実証への努力であった。しかしその効を見い出す証は極めて不確定で、相手の表情の中に運動をした喜びを見取ったり、相手との心の触れあいを感じた時に、僅かに効果を確め得たとする自己満足だけのことである。そして他日、何かの会で、又は道の出会いに声をかけられ、回顧の中で偽りのない世辞を受けて喜びを分ちあえる時に「教育者であればこそ」の幸せを実感として収められる。しかし半面このような曖昧且心象的效果の確かめで心許しては、大学教官らしからぬ人間ではないかという反省が強い。大学において体育学の専門領域の位置づけが未だ弱いのは体育学の日の浅さもあるが、既に25年の真摯な研究の基盤に立って活動の成果も上っていると思う。その中であって、私はふさわしく努力し続けて来たであろうかの批判なのである。

北大での29年。先輩の伝承的指導の盲従を強いられ、倒れて後止むの気概に猛進を重ねて来た私に、学問にむける目が養なわれた。研究の姿の厳しき、着眼・発想の豊かさ、学問の尊重、自己の堅持、権利と義務行動の密着。新学制に対応すべき従来の体育指導人の改革であった。観念としてあったものが、実行に努力を求められ膚に受けとめることが出来たことで幸せと思う。この境遇を去るにあたって、一層その場の良さを知り、観念から実在に塗り替えられるものと理解し、遅きに失した悔が残る。私は実践を身上とする体育人のくせに、体育を観念的理解でよしとする現代学生気質の傾向へ警鐘を鳴らしつつ、身体を通しての実在感を如何にして掴ませるか苦しみながら、又、自分が通った道でもあった。体育はこうした上に積み上げる学問でないかと自問しながらも、強い推進にあてる気迫の欠けるところが多くあったのを認め口惜しく思う。

1. 体 育 の 環 境

小学校に入った頃は、小学校教員が不足してかけ持授業が続出し、自習時間が多かった。体操場へ飛び出し、時には戸外へ出て遊び、叱かれて逃げもどるようなことを常に繰り返して居たと記憶する。学校が一条橋ふもとであるので、川の中で遊んだ覚えもあるので相当な悪態をしていたのだろう。水泳を身につけたのは此の時であるし、休みには中島公園で木の登りや虫取りを覚えた。札幌市街に電車の運転が開始（大・7・8）定山溪鉄道開通（同年10）、札幌飛行場開設（大・8・4）などで行動範囲が拡大。当時は都心でも遊びに事を欠くことない自然環境だったから、人体の基本的運動能力を万遍無く育てていた。私は父母の頼みに従って高等科を札幌師範附属に進み、家も隣接の場所に移った。相変らず遊びに夢中となり、始業前から夕闇に包まれるまで運動が続けられた。それは大正後期の自由思想普及の目覚ましい時であり、自由教育の研究が華々しく、附属小学校は研究校としての役を担ったと考えられる。高等科時代は校内・外に於て生徒の手による勉学法が進められ、特に学校の施設・用具を利用したスポーツ活動は、私が一番に地の利を得ていたといえよう。

北海道に種々のスポーツが移入されたが、全道的な組織はまだ見られず、新聞社や北大・小樽高商・中等学校運動部がイニシアティブを執っての地域的練習会から、次第に範囲を拡大して全道大会を開催にこぎ着ける目覚ましい普及発展ぶりを見せつけられた時期でもある。この様な状況下で全道小学校陸上競技大会（於北大グラウンド）、全道野球大会（於中島グラウンド）にも出場したし、バスケットボールのチームをつくって市内の各校へ試合巡りを行った。三角山でスキー、軽川（手稲）野幌へ遠足。すべて当時の大学や中学のクラブ活動の見様見真似での独習で、スポーツ環境にとっぷりと浸り、スポーツの定義通りに活動することがただ楽しかったことを思い起こす。「遊戯する場合にのみ完全な人間である。」とシルレルが言う如くに、何ら目的による拘束もなく楽しいが故に行った運動の価値を、私の人生の中に捜してみた。それは「これ……」という唯一の指摘が出来ない。数多くの因子を含んでいる無色透明な、生命力のような、生きているという現実に向けての内に秘めた力のようでもある。

師範に入って、強引にクラブへ所属されてからは、勝負の世界へ置かれて激しいトレーニングを余儀なくされた。いつしか「絶対に勝つ」の信念を植え付けられ、弱肉強食の闘争本能の冷厳な具現者と化した。対者との間に力柄の差が明瞭でない限り、鷹揚にスポーツマンシップの称賛をうけるプレーも出来なかった。それは勝負一途に賭けた視野の狭い狂った練習であろう。しかし練習の成果と共に不思議と余裕が生じて、競争相手が心の中に仮設するプレーヤーに替り、このプレーヤーとの勝負の中で己の技を磨き積み重ねをするように変じたと記憶している。当時の伝承的指導と先輩の言動の絶対性に従順を装いながら、私の心の中に芽ばえる技術の探索は一つの楽しみになって秘密練習の中に蓄積しておいた。意表がいの行動は邪道になるのであろうか、それでいて退勢の時にこの技術で幾度か危機を救っている。上級生から窮余の一策みたいに、まぐれ技として椰揄されたが上学年になって心ゆくままに發揮した。「両手によるジャンプシュート」である。今では片手によって華麗なジャンプシュートを殆どのプレーヤーは実施し、当時の苦労は誰にも考える要は無い。唯スポーツ界でも新しい技の工夫と、常に怠らず諦めることない己れとの戦いと、絶対に他チームの追従を許さぬ練習量の上に優位を築く。チームゲームは其上「和」によって一層高度の総力を生む。その為にチームの「かなめ」の果たす役目に極めて忠実であった。今にして思えば雄々しく単純な考えであったけれども、迷うことなくひたむきの精進が続けられたことが懐かしい。若者が抱く純粋によるものであろう

うか。結果として全国優勝の栄冠を手中に収めた。その体験が、私の長い年月に亘るチーム造りの中に貫く選手養成の信条となって指導が続けられて来た。選手活動の悲愴にして苛酷さがそのまま、次の者に引継がせて良いものであろうかという迷いに悩みつつ、それでいて、勝利を喜ぶ選手達の感激の様を眺めて安堵し、努力の苦と果し得た喜びを生涯へと生かす生活態度となることを願っていた。

2. 初等教育の時期

昭和7年、北海道札幌師範学校を卒業した。教育に意欲を燃えたさせたのは、教育学の構義の中でスイスの偉大な教育者ペスタロッチ（J. H. Pestalozzi）の伝記を知らされた時からだと思う。

フランス革命の余波をうけた戦災孤児の養育を引き受け、農村に入り孤児の中へ飛びこんでの生活、その中で教育方法の樹立。教授の基礎は①事物の観察がすべての教授の基礎である。②子どもの心理発達の順序にそうこと。「教えこみ」ではならぬ。③子どもの自学自習をうながすものであること。

彼のヒューマニズムに心うたれたこと、その教授法が附属小学校で体験し得た喜びを再燃させてくれるような期待に、私の教育者としての態度を造ってくれている。市内校に就職の困難な時であったが、幸いにも求められて札幌市立東橋小学校訓導として10年間初等教育に従事した。児童の傾向は、進学は2%も居ない。多くは家事の手伝い、丁稚奉公、季節労働の父母に付いて出稼ぎ、その日の生活に事を欠く者も多く廃品集めに歩かせられるなどで、学校の欠席を少しも気にしない家庭が相等にあった。しかし父兄の目は教師に、児童の前に模範となるような行動を厳しく求め、教師自身は常に教育勅語に示されてある倫理道德の具現者でなければならなかった。

ペスタロッチに憧れて奇しくも似たような環境を与えられ、希望と力に満ちたスタートであったが、未熟未経験の若者には理想と現実の隔離を存分に知らされた苦悩の修業であった。児童に好んで登校させるには、勉強の必要さを喚起する為には、生活の中の規範を守らせるのにはどうすべきか。このことは一部の父兄の啓蒙にもしなければならないことであった。その為に私は一日中児童と生活をもとにした。放課後（課外）の球技遊び、日曜の山登り、遠足など。学校近くの風呂へ誘いあい、宿直の時には合宿の真似事もした。努力は尊い。慈雨のように児童の芽を育んだ。良く動く子に、良く働く子に、良く言い付を守る子に育て、次第に全体意識を深めて行った。児童の生々と目を輝やかして一人残らず動きの中のリズムに乗った活動を「活動中の統一美」とテーマを掲げて市内の公開授業（昭和9年）で観て貰った。「児童の生活と体操科授業の形態」という研究発表の実証としてである。

場末の事でもあり、運動会には酒を飲みながら見物の父兄も居て、酔いがまわるにつれて大声でわめき決勝点に入りこんで、審判の教師に絡むのも珍らしくは無い。娯楽的行事の少なかった故もある。「運動会の教育的意味」の題で論説を求められた（昭17・5北海タイムス）のも、今に比して粗野な社会相に対して、教師の努力が小さいながらも花を咲かせようとして児童の真剣な教育活動の展開を期待かけられるのに、お祭り騒ぎの風習排除に燃す憤りのようなものであった。

時にファシズム化、戦時体制化が益々強められ、教育目標に皇国民の錬成が掲げられて、小学校令が国民学校令となり（昭16年）体操科は体錬科と衣替えし、戦時体制下の重要教科となっていた。鍛錬主義と皇国思想に凝集しての行動があるばかり。体錬科主任として、毎朝全校児童の正常歩行進の指導に当り、クロスして歩く列の変化の中に統一美を表現するマスゲームを実施した。心の中では自由の高い価値観と、時局認識に立っての全体画一的訓練の必要とを妥協させていたのである。

3. 体育指導の為の資質向上への努力

昭和17年、府瀬川師範学校長に望まれて、中等教育（体操）の教師となる。資格の問題で庁立札幌高等女学校教諭の辞令で師範学校講師兼任である。さて壇上で指導の身となり教材の理論と実技に取り組んでみると、己れの未熟さを知らされて愕然とした。基本となっている筈の直立、歩走の姿勢すら出来ていない。今迄は児童の前で示範していたものが、自己満足より発足しているもので、教材として指導要領に照しあわせると相違があまりにもあり過る。言う事と為すこと、そして目標への到達点へ、教師は必要に応じて生徒の視覚に答えられる表現が出来なくてはならない。それからは、学校の宿直を買って出て、体操場の電燈と鏡をたよりに姿勢矯正から始まった。中等教員免許試験受験の為には全教材をマスターしなければならない。全競技の理解・歴史・ルール、指導理論、それに生理衛生・救急法等々。実際指導に当たって見るとこれでよいという限界が無く、無限に必要度が延びて負担がいやに重く乗りがかって来るのを覚える。昼は授業、放課後（課外）はクラブの指導、夜中に自分の修業・充実を為す。疲労と睡魔に耐える不屈心は、学生時代の激しい練習の鍛えより得た信念によるものと思う。努力の甲斐があって、幸いにも18年8月に検定試験の予備、11月に本試と順調に進み資格を得ることが出来た。

現在と違って中央部の有力な講師を招いての講習の機会が極めて少なく、指導矯正の場に身を置くことの出来難い事が、体育指導の任に当る者にとってどれだけ自分を苦しめるものであるかを痛感させられて来た。体育指導者は常に講習受講の機会を求めて、人を納得させるフォームを身につけなければならぬものと思う。これは、受講者に無言の指導になり、その技術の真髄を知らせるものになるからである。

私にとって幸せだったのは、蓄積された体力（持久力）の成果というのか、どの講習会にもさしたる苦痛を覚えなかったし、休憩時間も休むことなく練習を重ねていた。独習した技術が講習の許容するものになっていたし、示範を求められる事も多く、その事によって研鑽の効を知り自信を生み出していたと思う。中等学校教員時代は種目別技術の幅を広め、得意とする種目では良く全道的講習の講師を命ぜられた。また、全道代表として明治神宮競技大会、次いで国民体育大会に現役選手として出場し、また生徒引率監督となって生徒とともに戦績に一喜一憂を送った。文部省の中等学校体錬科教授要目伝達講習に道庁より派遣をうけ、帰道後は各地に伝達に招かれた。戦時中も戦後も、スキーは北方領土の防衛とか雪国民冬季スポーツと、看板の替り方はあったが生活のスキーと変りはなく各地へ指導に歩いた。同時に資質の積みあげに夢中に送った時期である。

4. 北海道帝国大学予科時代

昭和23年4月。文部教官を任命されて予科勤務となる。先輩牧野昌次氏・恩師庁立札幌高女校長伊坂員維氏より予科長宇野親美氏へ推挙があって事が配んだと聞かされた。前任の有岡勇氏に心から迎えられて古びた一室に同居することになる。新築時は随分とモダンな洋風建築で衆目を惹いたことであろうが、その時はもう古色蒼然として採光も悪く日中でも薄暗かった。それでも品質の良い頑丈な素材を惜しみなく使用してあって、当時大学に寄せていた期待の大きさのようなものが感じとられた。間もなく体操場南西隅の一角の銃器室へ有岡氏と二人で移った。学生との緊密を深める為と自由時間のスポーツ活動に便宜を図るに良いという観点にたったからだが、戦時中の銃器保管を厳重にする為から窓外側に金網が張りめぐらされてあったのは、江戸幕府時代によくお目見えする「唐丸籠」

を思い起して嫌であった。それでも400名余の学生と同じ続きの体操場で運動を惧にすることは楽しかった。学徒報国隊を組織して戦争完遂に駆り立てられていた学生には、学園の生活を渴望していたに違いない。水を求める魚の如くに生々として講義に出席し、出席の必要を説くまでも無かった。昼尚暗い体操場は床は波うち天井の梁は組み目がはずれかかり、屋根は登ることも出来ぬ程朽ち、外からは丸太で支え倒壊を防ぐといった有様であったが、学生には一つの不平の顔色も見せずに若さを謳歌していた。国破れて被占領下の混乱の中、教育改革の嵐の最中に再建への踏み出しを遅しく見るように、引き揚げて行く学生の満ち足りた上気した顔を頼もしくも眺めた。忘れ物もその俚にしておいて紛失することなく、次週の講義時には無事本人の掌中に収め得ることも出来た。物質は事を欠き、むしろ尚悲惨は続いていて、世間では闇物質の動きが激しさを増していたが、学生諸君は戦争の痛手に耐え、復興に理想を描き、純粋を求めて毅然とした姿勢を失なわなかったし、それが心の豊かさを造っていたであろう。

昭和24年9月1日。宇野親美予科長の退任式が体操場で行なわれた。予科の制度が消えて行くのと同様に淋しく虚しい幕切れであった。しかし宇野先生の挨拶は、私の心に強い響きとなって教育者への示唆をしてくれた。

私の日記の中からその一部を拾うと

「私を指して感傷家と人は言うが、人情の世界に生きて来た者にとって当然のことであろう。

教育家は表現能力と感化能力が無くては立ち行く力はない。無信仰であるけれど、余生の藤学園の生活の中に安住が得られそうだ。考えは旧いけれど人情家である現伊藤誠哉学長はまたと得難い人である。以下略」

この上も無く予科や予科生を愛した宇野先生が、国立学校設置法（法律150）の公布にともない、予科の輝かしい歴史を閉じるに相応しい、理念や機構や人事など諸々の問題を含めて善処策に激しい情熱を燃して努力して来たが、経緯に満ち足りぬものがあつたのだと推測する。そんな心境の機微が言葉のはしはしに窮われて心が締めつけられた。宇野先生は9月7日に私達の部屋に遊びに来られた。学生を育てた体操場の老朽の中に昔を偲ぶかのように、或は、有岡氏や私が学生を相手にしている稚氣を愛でてか、いづれにせよ隔世の感とわが身の傷痕となるかもしれない予科の在りし日の追憶を求めていたかのようでもあつた。宇野先生は意に染まぬことがあると、時には掴み掛からんばかりに激しく争うが、学生に親しまれ人の心を深く捕える人である。9月20日は予科最後の運動会であつたが、心なし如雨で、ここにも淋しい幕切れがあつた。

5. 北海道大学の発足時の体育

官制改正で北海道帝国大学が北海道大学となり（昭和22年）、翌年に新制度対策委員会が発足した。太平洋戦争が終結して、目を覆うような惨状の中から復興の立ち上りを見せる。文部省の矢つぎ早やの通牒に対応し、新生改革の理想を掲げて出発しながら大学機能の充実に取り組む。

教官・事務官の定員増。各学部での講座、学科の設置増。学部の新設。職員組合発足。各学部に学生自治会が結成等々。騒然としていたが建設の槌音である。

新制大学の体育

戦前までは、大学の体育といえば、運動部やクラブ活動によって代表されている。起りは明治5年（1872）の学制頒布の時に遡らねばならない。明治6年の文部省雑誌に「開成学校生徒養生法」

が掲載されている中に、運動が健康・精神に益することが大きく、運動の中でとりわけ水泳が有益なりと推奨している。当時高等教育を行なう上級学校では、自校に招聘した外人講師が、講義のあい間に母国のスポーツ談義をするのを、知識の吸収や研究向学の心に富む学生の興趣を呼んで、試行錯誤や創意工夫をかさねて実施し、公開が為され、大衆にアピールし、大衆にもこれらの実施となっている。スポーツには娯楽性もあり、観る楽しみも出る。全国到るところで運動会やスポーツ試合が行なわれて、そのつど見物人が殺到している有様である。大学教育では19世紀のイギリスのように、スポーツを行い紳士的人格形成に役立たせ、卒業たる学士条件にかなう面と、学校管理の上からも奨励をしてきた。時には行き過ぎからの事故も発生が見られた。この間制度上なんらの組織も無く放任されてあった。従って実施者は少数の限られた範囲にとどまっていた。

戦時下の教育は国民の錬成にまともが紋られ、国家危急時の戦闘・防備力養成となり、次いでスポーツの実施禁止（昭和18年9月）、更に戦時教育令公布（昭和19年5月）となって戦局に即応態勢となった。

戦後、アメリカ教育使節団がわが国の教育視察を終えて、その報告の中で体育の重視と大学にもその必要を勧告した。文部省内にてもこの為の学校体育研究委員会が設けられて（昭和21年9月）、同委員会より「新学制発足の大学教育の確立、体育の正課」を要望している。（文部時報第859号）

C I Eのマグレール（Dr・T・H・McGrail）氏やホルムズ女史（Dr. L. Holmes）氏の体育の要望、体育担当官グラハム少佐（Major W. J. Graham）の熱意にささえられて体育は脚光を浴び、体育人は双手を挙げて喜びつつも大学体育は暗中模索を重ねた。体育保健研究委員会が発足して（昭和22年10月14日）、さきに出来た大学基準協会（22年7月設定）に申し入れをするため内容整備に苦悩を重ねた。（大学体育10年誌）

国民学校令によった「体錬科」の科目名の廃止、軍国主義教育の否定や体操教材中の禁止措置をうけて、中等学校では武道用具教練用具を焼却したり、集団訓練や大きな声で号令を発することすら中止する実態を見せつけられ、恥ずかしいながら民主教育の中での体育の研究と実践をどうするか、新機軸を為さぬならぬ大学での必修としての体育の在り方はどうあるべきか、発足を目前にして他を俟つ間も無く、手掛りを求めて奔走に明け暮れをした。昭和23年5月6日には民間情報局体育課顧問ニューフェルド（Newffeld）氏、文部省体育局振興課長栗本義彦氏を招いて道立札幌女子高校（現札幌北高校当時北2西11）にて「我が国の学校体育の在り方」について座談会をもったり、翌日は私も北大の体育教官が揃って栗本氏を訪い「新制大学体育案」を聞くなどをはじめとし、衆知を集めて連日の研究協議を持った。あの様に一致して夢中になれたことは快い充実した思い出となっている。24年1月21年に一般教養学科教官予定が発表になり、体育担当教官の顔ぶれが決まった。天野（樺太医専）奈良岡、有岡、宮崎（予科）中西（土木専門）山崎（富山県体育課）。発足当時は、理論が教授1助教授0(1)実技が教授0(2)助教授5(4)「内は定員を示す」で発足し、続いて本田（学生生徒健康相談所長）室木（農林専門）が発令。

22日 本部において教養学科中の体育について打合せを行い「教授内容・時間担当等」を定めた

6月1日 体育科教官の懇談会（於本部）

7月27日 教養科担当教官全体会議（於理学部会議室）

7月28日 新制大学開校式

スクエアダンスの講習会

道民間情報教育課長ニブロ（Winfield, P. Niblo）氏によるスクエアダンス講習会がもたれた。市内

の大学教官が招集された。鍊成に駆り出され拘束を受けた体鍊科が体育科と改められたのも単に表現だけのものではない。自由・解放・楽しさの中で副次的に民主化へ向けての効果を狙って、その為の指導者養成を意図されたものであったろう。24年1月24日、C1E図書館（接取されたビル・北1西3の角で）第1回目を、1月31日に第二回目を、そして第三回は北大の体育館（体操場）で実施した難しいものでないが馴染めなかったせいもあって、これは指導の任を果たしていないし、あれ以来一度も踊っていない。

翌日再びニブロ、栗本両氏を招いて「大学体育」について座談会（於北大）を開いた。

5月2日 教育学部入学試験連絡会議。

5月6日 体育・音楽専攻学生実技試験。

5月12日 教育学部入学者選考会議。

流れる時とリミットによって事務は進行する。理想的画期的創造を企図する教養構想が、浮動のまま苦悩を乗せて制度改革の実施がスタートしてしまった。教養科主任市川純彦氏は25年6月7日発行の自治会報第三号で

「古い伝統を持つ此の北海道大学に約800名の若々しい諸君を迎えた。新制北大の新らしい歴史を作る先陣を承った諸君を前にして、私共の期待は非常に大きい。然し希望をもつて入って来た諸君にとって、日常の学生生活で、その期待にそえない事も多々あるのではないかと、私は今、その事を心苦しく感じている。種々の事情を述べて諸君の不安疑惑をおこさせることは慎みたいと思うが、実際に確立されているとは言えない。転換期としてやむ得ない点もあるとしても、学生と教授と真に一体になって困難を打開する事は出来るので、それ以外に道はないと思う。以下略」と述べている。これは当時の多くの教官の心情でもあるが、今もなお、理想へ向けて様々の曲折と改革、修正が続いている。

教育学部に入学した学生34名は文類5組を形成。音楽と体育の専攻を志す者である。創設期より教務に深い関わりを持つ有岡氏は上京し、文部省主催の教養科の各講演に出席し（6月15日より）カリキュラム・運営・設備等多項目にわたって受講した。

26年4月の学生使覧より関連の項を抜粋して当時の回顧の資としたい。

「教養科のカリキュラム」

教養課程の履習について

新制大学の特色の一は、一般教養の重視される事である。専門的な狭い分野に入る前に、人文科学・社会科学・自然科学の広い基本的な科目を学ぶ事によって、自由でとらわれない人生観・世界観を確立し、又人格を完成し民主社会のよりよき公民たるの基礎を培わねばならない。以上の観点から本学では新入生を①文類②理類③教育学部の体育専攻④同音楽教育専攻⑤水産学部遠洋漁業科⑥同漁業科⑦同製造増殖科に分けて入学させ、一般教養を授ける中に、学生に自己の特色を見い出させ、又学部学科の内容を知らせ、自己の望む学科へ進入させる事になっている。

文類に入った者は、文学部・法経学部の各学科及教育学部の教育学専攻、体育専攻と音楽専攻とを除く学科へ、理類に入った者は理学部・工学部・農学部の各学科へ進入出来る。

教育学部の体育専攻・音楽教育専攻・水産学部の遠洋漁業科・漁業科・製造増殖科は、その学科の性質上、入学後の学科変更は認めない。

但し医学部へは以上の分類に関係なく、医学部受験に必要な単位数を取得している者に限り二年修了後、誰でも同一資格で受験し、その成績により入学出来る。以下略

体育は必修科目で、学生は在学中に（出来れば一般教養部在籍中に）4単位以上（講義2単位、実技2単位）を取得しなければ卒業出来ない。

清新・意欲的開学に応じて、入学生の戦時中の空白をとりもどそうという向学の気迫や頑張りの様を思う。

B、大学の一般体育について感じたこと

北海道大学における体育の発足は、文字通り五里霧中で、その中で衆知を集め鳩首協議をかさねて、大学らしく、そして北海道の特殊性あるものを創る努力をしたが、結果は体育保健研究委員会が作成発行した「新制大学における一般体育科目設置の参考資料」（23年10月）に包括されたものになり、この基準の中でスタートしたものである。私達はこの他に体育専攻学生を対象にした体育学科の構想をうち出していたので、二者の関連と理解が得られないで渋滞し、三年程して専攻生募集が打ち切られたことで、体育研究が甚だしく遅れをとったことを思い起して残念である。

幸い本学は広大なスペースの中での建学であったので、一番因難とされる施設拡張の心配も無く全学支援方式にのっての用具費捻出も満ち足りた。専任教官も基準で示す「実施対象学生数1000名は5人以上」でいえば最低の線であるが、新体制への対応がこと新しいだけに、不備の多い他大学の羨望と注目を浴びていたことは事実であった。それゆえに私どもはプライドを持ち理想へむけての情熱を燃した。

(1) 履習時間

大学の期間は身体の完成期であるという通念を裏切って、学生諸君の全般的に体力低下を肯定しなければならない。運動をやらせるとすぐ弱音を吐くし、すぐ運動を中止する。最初は怠慢のせいと思っていたけれど、そうでもないらしい。進学で生活を歪められて過して来た中・高校生時代に、機械化現代は頭がすべての事をおし進めるという考えが優先して、体育を不要の学科位に思って、体力に注意を注ぐことなく体力の未熟のままで大学に進んでいると推測せざるを得ない。30年近くも学生の動向を眺めて来ると、一般学生とクラブ学生の隔差があまりにも開いてくるのに驚く。

発足の当初は農学部前方に教室があり、グラウンドが現体育館のところなので、種目によっては10分の休憩時間に900m位移動をしてこなければならない。勿論走って来なければならない。体力測定に400m2周走があったが全員が疾走をやり終えた。戦時中の錬成を体験した者の体力では苦にもならないのかも知れない。戦後教育は過保護という温床で行なわれ、受験を唯一にして身体のトレーニングを欠いている。体内に蔵するものを出し得ないでいる状態で、今また体育履習を「一年半」切り上げの声が出され体育教官内部でも検討を進めているが、私は当初から見て大きな退歩であり、学生諸君には不幸な事であると思う。このことは制度の上で、学生増や研究面から4年間の体育履習の困難さを解消する便法だけに考えを走らせ、人間の将来にむけて必要欠くことの出来ぬ体育の重要性を自覚し、理想へ向けて前進するためにむしろ教官増や施設の拡張や計画を練るべきであるのに、反対にその事を放棄するのは遅ましい成長へ翳りがして惨めさを覚える。近時「一億国民総スポーツ活動」の声が高いが、その由来は、政策が持ち堪えられなくて広がる環境悪の中で、人々の僅かな自衛の姿である。身体トレーニングのない学校生活や体育軽視は、どれ程本人にとって今後の研究や人生にマイナス的影響を与えるか知れない。時局対応に逆行しているという腹立たしさを覚える。一年半履習案は、体育教官の志成らぬ空しさの中で悄然として制度のレールに乗る姿である。

(2) 活気を与えるもの

体育実技は出発時は教官 5 名で、対象学生数 800 名。現在は専任教官 10 名で学生数 1 ～ 2 年合せて 4,558 名。(50 年 12 月現在)。施設は数の上でホッケー場が分離して独立、軟式・硬式野球場、庭球コート、陸上グラウンド等で、クラブ活動を対象に用意されていたものである。授業優先の特権を得て正課時使用しているが、体育授業の面から言えば旧態の儘で増加した学生を収容している。換言するならば学生の正課時の利用時間を縮小して教育の密度を下けているし、多数を対象に画一指導という戦時中の教育法の再現にもなりかねない。特に希望したいのは多目的に使用出来る運動広場と、懸案になっている第二・第三の体育館や室内温水プール、視聴覚室・講義室の設置が欲しい。学生人数の増に加えて、現時は技術の高度化から従来屋外コートで実施のバレーボールやハンドボールは室内に入るし、本道の様に荒天や冬季期の長いところでは体育館の利用度が特に高いのに、依然として従来通りの実施より考え方が進められていない。学生に体育認識の深まりを求めるには、その以前の中、高校時における受験対応の生活見直しに戻らねばならぬこともあるが、学生に場所や施設が与えられれば積極的な動きで活気に満ちた体育活動の展開が見られる。「身体を通しての学門」でありながらそれが、為されない教育目標の漠然さ、「身体科学」を掲げての研究施設の貧困さなどが体育学の価値づけを弱いものにしている。

(3) 可能性を引き出す為に

体育が「運動を通して人間形成に寄与する学問の領域」を占めるものとすれば、まずその研究は人間の、人間として持っている活動領域の最大範囲の発揮を起させる刺激を与えなければならない。そのためには、学生に理解をもたせ主体性を発揮させるべく「どう実施させるか」をふまえての課題と問題解決の意欲にゆだねなければならない。各人が求める教材の範囲は、成人の域にある程多種多様になっているので、そのすべての者に満足ゆくものの提供は到底望めない。しかしながら高校で経験を得た教材を集約して幾つかを用意して置くが、おのずつと施設の状況による制約が出て来るし、経て来た様々な環境・既得能力・体力など千差万別であるため、本来は同一種目の中で更に細分する必要がある。この多様化に全面対応は出来ぬまでも、種目を広げたり教官配置増に考慮が為されなくては現在抱えている隘路を切り開くことは出来ない。カリキュラム内容や進度の設定の上で目標をどこに置くかによって学生の反応が様々である。高度だ。程度が低い。高校と変らない。などの不満を発しているのは良い方で、傍観の方へまわりかねない様子を見ると、教官は高校履修程度へ規準を下げて進歩の無い条件下で指導を行なったリクリエーション的な取扱いになってしまう。高い水準にある者はこの種目を放棄したり、人数制限からはみ出た者は説得されて好まざる種目への変更を余儀なくされる。苦痛の中で時間だけの参加になったり、種目の単位を落して卒業までに二単位修得に方針を替え、それが安易な参加を助長して受講態度を大きく変えている。落ちこぼれ対策の補講回数・受講者数も漠大で教官の負担が膨大になる。体育は学生にとって、本来は楽しいものであるべきなのに、毎年卒業間際に補講に殺到して、教官にも学生に大きな負担になるのはおかしいのである。やろうとする意欲や、やってみて楽しさを知るのは、学生に存分の活動の場とグループ人数の適度が計られれば、大部分は解決出来ると考える。可能性の引き出しは、学生自らのやろうとする努力の醸成から始まる。

(4) 体育無用論への反論

これは本質的なものでは勿論ないが、体育の無関心か忌避の表現か、学生の中に時折「毎日の行動や作業・通勤などを指して体育(スポーツ・運動)をしているので、とりたてて体育の授業を受けなくとも良いでないか。」と言う。こうした考えが案外と真実のものとして特に女子学生に多い。これは納得いく説明が与えられない限り積極的な参加は望まれない。この学生は苦痛の中で受講をよぎ

なくしていることだろう。体育理論の中で、こんな幼稚なしかし案外頑強な考えに対する啓蒙につとめばならぬのだが特に為されていないと思う。全体に必要な無いことであるので部分的に行なおうとするが講義の場が実技にはない。騒々しい体育館の片隅では、そんな事より早く活動の展開を望む気持の方が強くて能率の上らぬ労作である。

生存の上から運動・動作・行動が成り立ち、体育は形成上運動を組立てている。然しわれわれの行動は、そのすべてが有意的で目的行動である。その為にその行動を達成する以外の活動を不用として限界を狭めている。体育は多様に設定した目的向って秩序を立てて、科学的な理論をふまえて実施しているものであるところに、各自の持っている能力の限界への挑戦をもって可能性の拡大をはかるものである。

トレーニングの効果は自分の努力によって己を高める自己形成にはかならない。これを運動生理学的面に見るなら機能の変化を予期する為に一定の法則のあることを知る必要があるし、如何様に活動すれば器官や組織がどの様に改造されていくかの法則に従わねばならない。体育の科学性を生かそうとしても実験・実証の為のものが一般学生対象に用意されていないので、強い説得にならないでいる。青年期がトレーニングに最適の時期であり筋パワーやスピードや持久性最盛期として迎えるならば人生に対するフワイトが内に満ちて、その人ならではの持ち味、特性の發揮に期待が持てるのである。現代社会が文化や経済の高度成長を誇りにしているが、そこに種々なる社会問題が起り、活動的人間を圧迫して、決して快的な生活とは言えない。それ故に体力の充実と積極性を求めねばならないが、外見若くして内面老化した気運の秘そむのが嘆げかわしい。人間は反射や調節の運動を有し遅く生きてゆこうとする理想を求めながら、刻々変化する環境への適応行動や活動の創造実践を為さねばならない。最高の教育を受けた学生が、社会に出ればいろいろの場で指導的立場を与えられることであろう。その期待に添えるためにも、健康の理解と健康生活を自ら身につけて、身をもって範を示すことは、学ぶ者へよせられている社会の期待でもあるし、学ぶ権利とともに負うべき義務である。

(5) もどかしさ

体育に関する全学的予算や施設の漸増はみられるけれど、それは学生増や学生の体育実技への志向の高まりを勘案しての一般学生を対象に加増されているものでは無い。クラブ活動の学生が自分達の種目にかける想像に絶する熱意や、積年の実績の上にたって、学生部の施設増設がこの情熱に直接に右左される向きも判らぬでもないが、しかし従来の限られたクラブ活動を対象に設置された施設の数や予算の一時的手直しでは、一般学生を包括出来ないし、二者同居ではクラブ活動も萎縮する。時間帯の上での区分があったとしても一般学生の運動形態の上で好みが同一にはならぬ。教育効果をあげる為に目標設定して学生の方向づけの教育労作に苦心を重ねるのだが、情勢対応の進展がみられなかったり、使用頻度が多くなって従来より消耗が激しく、その補修が迅速を要するのに遅々として進まないもどかしさに過して来た。他の領域の研究教育との比較もあろうかと思うが、スタート時点の状況から大きな変化が無いだけに刻々と要求の高まるのは必然たるもので、私達体育教官の真意を汲んでほしい。かねて希望していた全学体育協議会が確立して、全学を対象とするスポーツ活動のすすめが為されなくては部分的解決で動きがとれないところに来てると思う。体育教官にはいずれも2～3の専門技術を身につけているが、学生の希望するスポーツの多様化に広く対応する為の自己研鑽に励むことと、全学的スポーツ環境造りに関わりを持たなくては一般体育の使命達成は難しいと思う。体育の生活化の観点に立てば、やはり全学を対象にして体育効果をねらいとしなければならない。教

養時の教科体育実施に引続き学部体育があるべきだ。そのために学習や研究グループの構成、それぞれの実施時間帯・場所の協定・グループの親和度、相互の連帯を高めての実施等種々の条件を満たす為のいくつもの小集団による自主活動の展開を計画すべきであろう。運動不足による文明病・現代病の蝕みは何も一般大衆間における問題ではない。憲法25条「健康で文化的な最低限度の生活」保障がある。健康に生きる権利がスポーツ実施の中に主唱されていないのは、学生諸君の・スポーツ自覚の低さなのか運動回避なのかと不満を持つことがあるが、現状に対する諦めにつながっては大変なことである。大学ではゼミ教育で最も充実を図り効果の予想も高いのを思えば、体育にもまたゼミ形式を取り入れたい。本学では出発当初から助手が無く、実験講座扱いになっても得られない状況であるが、東大はこうした方法で実施して著しい成果を見ていると聞く。私達が公的直接的な発言の場を持って新機軸達成を図るなどの時期はまだ望まれぬのだろうか。

7. 社会体育の指導

大学に職を持つ立場から、また年令の故もあろう、そして札幌を郷土として成長した縁から体育を通しての社会教育に微力を求められる機会が多かった。戦後の指導理念や組織づくりに、私を通して北大に期待するところが非常に大きかったと感じた。当時大学内に改革の旋風が激しさを加え、地域での連帯感を深めるに暇もない時もあったが、それでも社会体育に無関心の許されぬ情勢下にあった。新旧頭の切り換えが要求され、それ無くしては活動の場での対処が出来なかった。自らも役員を引受け、行事の計画や遂行もして、体育行政にも物を申さなくては戦後の新しい躍進が望められなかった。そんな立場を、大学教官なるが故に社会が認め期待してくれたと思う。スポーツ振興法が制定（昭和36年6月16日）されて、市町村教育委員会の任命による体育指導委員は現在全道で約3,000名になるがその時逸早く組織造りを行なって広域北海道に広く地域スポーツの振興を計ることの急務を知った。組織を持たない不特定多数の地域民を対象に、仲間づくりや講習会・地区の体育振興会育成などを行い、市の行事に歩け運動・オリエンテーリング・歩くスキーなどを取りあげてもらって、それらも軌道に乗った観がある。競争や高度の技術を要しない、経費負担も少く、誰でもが入りこみ易いことを狙ってスポーツの生活化にとりくんだ。現社会では競技スポーツ志向の層と一線を劃して大衆が「生存の要求」又は「生活充実の要求」による施設や理解が驚く程強いものがあって、計画や実施に楽しみを覚える。都市の巨大化が進んで情緒が薄れ人間の断絶を憂う心に救いを与え、公害や灰色の生活環境に潤いをもたらし、集団行動の自覚に立って大衆マナーの向上も見られる。スポーツ活動とは、共通する目的に向って利害を超越し、楽しいが故に協力するところに成立つ活動形態であって、結果健康の実が結ぶと思う。社会体育への挺身は体育人に課せられた。また一つの使命とも考えられる。

お わ り に

顧みて「新しき事の発見」には何一つ貢献するものを持たなかった。「よき方法」の探索を続けながら、むしろ、古きものの良さを見極められて、少しでもそこへ近づける為に「如何にするか」を考え続け実践をして来たといえよう。体育の効果を求めるには、体育・スポーツには或程度の危険が伴うことを予測して行なう活動であることの是認が必要であるだけに「生」への執着、「死」に対する恐怖を知ること、人間の最も重大且緊要のものとして、危険の察知と逃避を教え、細心にして果敢な行動の要求をし続けた。又、人間は素直に人を信じあって、協力によって逞しさをつくり出さねばならぬ弱い存在も知るべきである。だから信ずると同時に人からも信頼を受けられる人づくりが望ま

れるので、それを体育・スポーツの場に目標を掲げるに相応しいと思う。

札幌に育った私が郷土への愛情がひとしおであるのは、昔は北大キャンパスに札幌が含まれているかにも思える程広大で、構内が日常の、そして円山や豊平川が遠出の遊び場として心の育ちがあるので、自分を見つめる中にいつも北大や札幌の自然環境が姿を現わし、それへの思慕が募り心と環境の密着を思うのである。環境愛護の考えは、心の育ちに欠かせない大切なものとして、環境づくりには必死で、素朴さ原始的良さを加味した体育環境の再限を願っている。この中で体育の重要性は終生その人の生活に纏わりつくものであって、生涯教育とか生涯体育は今に始まるものではなく、それは民族の歴史とともにあったと思う。唯現在には特にそのことを主唱しなければならぬ社会環境に対する警句にも等しいのではなからうか。

体育が「全人教育」を目指すものであれば、指導者はその「人間像」をとらえていなければならない。その人間像はわれわれ人類の理想像で高邁にして不動のものであるべきと思うが、時代によって社会の価値観の変遷につれて動揺してきているようだ。ナショナリズムやファシズムの中で、又はルネッサンス期や産業革命期に、そして民主主義の中で、求める「人間像」の違いがあるのであろう。それは人間によって組織されている社会での人間的要求の違いを背負う人間の宿命と言えないだろうか。しかし底流にあるものは「真に自由なる人間の完成」を求め続けている歴史である。

体育の目標は人間の生命である生きるエネルギーの改造や、平和建設を志向し、時には民族の繁栄を願う教育活動となって表現化するであろうけど、人間に求めている健康とか堪能とかよい性格というものは、時代が必要とする人間像の中で求めている時代を超越した共通の目標であることには変わりがない。

人を教育するという事は、それ以前に己れ教育為し得るものでなければならない。人生は経験の積み重ねである。その為には常に研鑽精進の陰しさに身を置き、反省と力を蓄めてそれを自信に換えて人に接する姿勢を忘れぬ配慮が要る。

大学での生活は、大学に期待する社会に、大学人の自負に相応しい力の発揮をするためにも、科学の追求に不断の努力をされている他領域の研究成果にもあやかりながら体育学に貢献しなければならない。しかしこの尽そうとした私の行動は目的にむかっては程遠いものであって、それ故に力の不足をカバーするに体当りの他に途は無く、毎日が精一杯であった。誇ることが取りあげてこれといったものが何一つ無いということで、他の人々の事績の偉大さやその人の非凡さにしみじみとした敬意の念を深めて、翻って己の力侘度や人間的価値づけがなされ諦観が生まれて来る。

新制度発足して25年。この中で学び研究を終えた人々の、学生々活をふりかえって、その中で得た喜びや不満を批判に載せてもらって、私どもの歩みに今後の指針を与えて欲しい。「人間形成」という語が安易な使用となり、人間形成の根拠や研究された成果をどんな方法で大学で試行するのか、科学や人員や経費を導入した生活圏の環境設定等、体育の理想に向けて問題は山積し後をたたない。しかるに表面化して、学生には必修によって束縛感を、教官には必修に甘えた安易感が全く無かったか、二つながら人間の怠惰心が体育発展を遅らしていると言えないこともない。そうは言うものの多くの体育人の長い努力は、学生の体育志向の高まりに結びつき、或は国民一般の自己の体育管理の目を開かせて来ている。この中で学校も社会も、人間幸福に結びつく体育としての研究と実施に特に理解と支援を願いたい。

最後に、退官にあたり、こうした良い環境で生活を送れた幸せと生き甲斐をふりかえって、私に寄せて頂いた諸先生のご指導とご好意に深甚の謝意を表して筆を擱く。